

「ゆとりの教育」と人づくり

上 廣 榮 治

夏の暑さにも情気にも負けず、気力充溢して一日の精進を終え、朝に誓った目標を今日も達成したことを確認するときの幸福感、その何ものにも代えがたい貴重な一瞬は、会友なら誰しも実感しておられることと思います。まさに「ゆとりのひと時」です。

さて、同じ「ゆとり」でも、近頃盛んにいわれる「ゆとりの教育」という言葉が気になります。子どもたちの勉強が大変だ。授業時間が多いために、毎日毎日の授業や予習復習に追われて、一人一人の個性を伸ばす時間もない。そこで、授業時間や学習内容を減らし、「ゆとり」を設けて個性を伸ばす時間を子どもにあげよう。これが「ゆとりの教育」の論拠です。そのためには、授業を週四日にしてはどうかなどという論まで出ていると聞くに及んで、首を傾げてしまいました。

昔もそうだったと思いますが、今の子どもたちも予習復習などはあまりしないといえます。授業の間だけは学校に縛られています。それ以外の時間は、ほとんど学校の勉強とは離れています。

ただ、有名校を目指す子どもたちは、学校の勉強だけではとても合格できませんから、塾に通って勉

強する。徹底的な能力差別をする塾では、少しでも怠^{なま}ければたちまちランクが下がってしまいますから、夜遅くまで塾の勉強をすることになります。

つまり、学校の勉強時間が増えれば、それだけ塾のための時間は減って子どもたちは楽になり、逆に、学校の授業が減ると、それだけ子どもたちの競争は大変になるという勘定^{かんじょう}になりそうです。一方、有名な学校など目指さぬ子どもたちは、学校が終われば、同じ仲間と一緒に遊んでいられるだけです。

どちらのタイプの子どもにとっても、もはや、学校の授業などは、まるで負担にはなっていないのではないか、ほとんど意味を失いかけているのではないかと思えてなりません。だからこそ、イジメや学級崩壊ばかりが起ころのではないのでしょうか。

電車の中でしゃがんだり、もたれたり、何ともだらしない^{かつこう}の恰好をした高校生たちをよく見かけます。はたして彼らが授業のせいで「ゆとり」をなくして苦しんでいるように見えるのでしょうか。彼らは「ゆとり」を持って余しているだけなのです。無為^{むゐ}な時間だけはたつぷりある。しかし、やることも、したいこともない。まだ若い身空^{みりょう}で無聊^{むりょう}をかこち、退屈で死にそうになっているのです。少々刺激的なら、どんなことをしてもいいと思っているかもしれません。何しろ、家でも学校でも「してはいけないこと」を教えられていないのですから。

そうした彼らに、もっと「ゆとり」を与えるというのは、どんな効果があるのでしょうか。これまで学校で何を教え、何を教えてこなかったのかという反省なしに、さらに自由放任しようとしているだけではないでしょうか。

事は、根本的に間違っているのです。「ゆとり」の意味を取り違えているのです。

たとえば、時速二〇〇キロで走れる自動車で、制限速度一〇〇キロの道を走れば、「ゆとり」があり

ます。しかし巡行速度が一〇〇キロしかない車で、制限速度一〇〇キロの道を走ったとしたらどうでしょう。とても心配でなりません。取り返しがつかない事故も起きかねません。

「ゆとり」とは、こちらに十分以上の実力があって軽々と事を行なう場合に使われる言葉、あるいはその際の心境をいうのです。しかし、およそ教育を受けようかという年齢の子どもたちは、倫理的にも知識のうえでも、まだまだまことに不十分な段階です。つまり、本質的に「ゆとり」とは無縁なのです。

性能が低い車と同じように、子どもたちにはまだまだ巡行速度が不足しています。教育によってすみやかに、知・情・意のすべての面で「ゆとり」が持てるだけの実力を身につけさせる必要があるのです。そもそも教育とは何であるか。わが会では「人づくり」だと考えます。人をつくること、つまり先程のたとえでいえば、必要な速度で走り続けることができる丈夫な高性能車をつくることです。

自動車をつくる時間を減らし、制限速度のハードルを下げても、よい車はつくれません。つまり、授業時間を少なくしたり目標を低くしたりしても、人づくりは容易になりません。この社会を走り回る車の性能も、人間の資質も、大幅に低下することなのです。

日本の大学生や高校生の能力や教養が非常に低下しているといわれています。大学生の教養不足は、「ゆとり教育」で受験科目を減らしてきたためだという指摘がもっぱらです。また、子どもたちの勉強時間もかつてよりかなり減って、諸外国に比べても低くなってきたそうです。誤った「ゆとりの教育」の成果が、確実に現われてきているのだといわざるを得ません。

皮肉な物言いをお許しただければ、戦後教育のある部分においては、当初から極端な「ゆとりの教育」が行なわれてきました。それは「倫理」教育の分野です。伝統的な倫理観、親に孝、友人に信、兄弟に悌、君に忠など、人を思いやり人を尊敬する教育は徹底的になおざりにされてきたのです。

もちろん、民主主義の世の中になって主従関係もなくなったのですから、いまさら忠君愛国はないでしょう。しかし、孝や信や悌はどうでしょう。親子や兄弟、友人という関係は、まだ厳然げんぜんとして存在しています。主従だ国だという重しがなくなった分、現代に生きる私たちにとっては、かえって大切な関係になっていないかと思えます。

ところが、こうした徳目をみな、家庭や学校の教育目標から外してしまいました。倫理なことについては「ゆとりの教育」を、つまりうるさいことを言わない教育を行なってきたのです。こうして、倫理というブレーキを持たない危ない自動車が、たくさんできあがってしまったのです。

年々凶悪化する少年犯罪、かつては考えられなかった非倫理的な事件が、なぜかくも次から次へと起きているのでしょうか。それは、彼らが倫理というブレーキを持たない欠陥車だからです。もし、彼らに倫理という機能が少しでも備わっていたとしたら、ここまで事態は深刻にならなかつたと思います。

「ゆとりの教育」とは、一歩間違えば、かくまで害悪の大きなものとなり得るのです。

ところで、私たちもまた、人の悪をいわず、あまりうるさいことは申しません。善も悪もそのままに「はい」と受けて、現実を大肯定いたします。うるさいことを言わないという点では「ゆとりの教育」に似ているかもしれませんが、しかし私たちは、現実を肯定してそれでお終しまいではないのです。あるがままがあるがままに認めたくえで、「反省すべきは反省し、踏むべき道を踏む。つまり実践をするのです。

人には「はい」と受けますが、自分自身は「朝の誓」のままに厳しく生きようとしています。目標を下げ、自分を甘やかすことは致しません。人として制動力抜群の人間に、己おのれを鍛え上げようとしているのです。

「ゆとり」は、夕べのひと時、今日一日の実践を振り返るときだけに、大事に取っておきたいものです。